

第6回(11/12) 「仲間以外はみな風景」 ——他者の観念的消去

1. 連絡・報告

次回までの課題について

グループ分け(座席番号)方法について

2. BBS 投稿から

「元々は働きたくないしやりたい事が何か見つかるんじゃないかと思って大学進学を選んだけど、入学してからは何のために大学に通ってるのか分からなくなってきた。2年たった今でも目標や夢も見つからずただ単位が取ればいいみたいに思っている自分がいることに改めて気付かされてしまった。」

「今回の議題で改めて自分が学校に講義に興味ないことを自覚させられて、それでも自分は今後も学校に行くことの意義を見出さずに通うのかと思うと憂鬱になった。」

「自分のやりたいことがはっきり分かっていなかったのが大学に入ったが、未だに見つかっていないし授業を単位をとるために受けているものもあり、ちゃんと目標を決めなきゃなと感じた。何か自分の好きな事を見つけないと大学に行ってる意味がなくなってしまう。」

「自分自身まだ就職したくないという安易な考えから大学進学を選択したが、ディスカッションを通して割と同じ考えの人が多く知った。知識を深めようとする意欲がないのに、大学で学ぶのはあまり意味はないのではないかと感じた。」

「将来の夢は特に決まっていなくて、大学も授業が楽しいわけでもないし特別興味がある講義もない。なんで大学進学をしたのかと問われれば、周りがみんな大学に行くからと自分の意思ではなく、その時の状況に身を任せ流されているような感じである。講義を聞いて何の役に立つの?とは思っては少なくなったが、やはり興味が持てないので前向きに勉強しようとは思えない。」

「その授業を受けたいと思うかは、その後必要か分からないから受ける気が起きないのもあるかもしれないけれど、その先生の生徒からの信頼なども関係あると思った。」

「先生や授業の形式によって授業態度は変わると思う。興味のある講義をとっても先生が一方向的に話すのを聞くだけだと時間が経つのが遅く感じたり、眠くなって集中力が欠けてしまう。反対に興味のない授業がグループワークを取り入れていたら退屈を感じない。また講師が明るく好印象だと意欲的に取り組みたくなる。」

「就職から逃れるために大学に入学し、大学にいる間に目標を見つけなければいいよねぐらいの感覚でいた。なので履修するのも興味関心がある科目ではなく、ほとんどが単位目当て。ディスカッションを通してそのような考え方をしているのが自分だけじゃないとわかって少し安心した。でも、目標を持たなきゃいけないということもわかっているから、同時に危機感を持ってしまった。」

「世間一般の考え方が、高校の次は大学だと思っていたので大学に行こうと思いました。親の期待に応えるためにいいところを目指したけど、勉強する意欲や、やりたいこともない私は結局全滅してこの大学に通うことになりました。今はドラマとかでやりたいことがないと生きていけないのか?という問いかけをする内容をよく見ますが、結局夢や目標は持つべきという結果で終わるのを見て、やっぱり目標がないと何もできないんだと思うと日々焦りを感じています。」

「前回の講義…それともつながるが、勉強とは 意欲的にすることではじめて成り立つもの だと思う。しぼることな

く、自由にしておいても「学びたい」と思ったら言われなくても勉強するものだ。自分も含めてだが、学ぶことが意欲的にならず、学校外でその分野を学ぼうと思った試しがない。配布資料からも学習意欲の低下とある。興味がないから理解したいと思わず、学習する気にならない。なおかつ、勉強をすることを強制されてしまったら意欲低下がますます加速するばかりだ。その立場にある人は勉強をする大切さをもっと教えていくべきだ。」

「「大学を卒業するのが就職する切符」なのだ親にずっと言い聞かされて来ました。確かにそうなると思えば勉強しに大学へ来ていると言うよりも、単位を取るために来ていると考えるのが妥当でしょう。学生全員に共通するというわけではないと思いますが、「今さえ良ければ良い」という気持ちが今の若者には少なからずあるのではないのでしょうか？「未来のことを考えても実質は何も見えてこない、だから今と向き合おう」を何か履き違えているのかもしれないと考えました。」

「学びを等価交換として考えているという点は確かになと思った。どんな講義でも、単位が取れなくなったならばきっとその時点で受けるのをやめてしまうだろう。また、かつての日本の子供は世界のどの国よりも勉強に意欲的だったと書かれていたが、消費主体な考えの現代の環境とは違うにしても、どうしてそのように意欲的に取り組んでいたのか気になった。どの国よりもものだから相当熱心だったのではないだろうか。」

「レジュメには、「どのような財貨やサービスが「等価交換」されるのか。その「答え」が気に入れば「やる」し、気に入らなければ「やらない」という採否の基準がある。」と書かれている。しかし、「やる」／「やらない」の判断は、「気に入る」／「気に入らない」という価値判断だけではないと思う。授業を通して得られるものがどんなことの役に立つかが分かれば、「それが欲しい。だから頑張る。」という明確な目標ができると思う。」

「「これをするとなんの役に立つの？」という問いに対して考えてみると、自分は今まで具体的に何の役に立つのか分からず、周りに流されるがままにやってきた。いつか役に立つだろうと思ってやってきたけれど実際に役に立った場面はあったかと聞かれるとこれとって思い当たる節はない。このような経験からすると結局、自分に利点があると思うと「やる」し、そうでなければ「やらない」という選択になりそうだ。」

「「何の役に立つの？」という問いは、子供の頃の学習内容がそのまま自分の生活に結びつくようなものだからではないか。例えば文字や掛け算は習得すればすぐに使う機会が得られる。自分が努力した成果がすぐに実感できるのだ。しかし、年齢が上がるにつれて日常生活に利用できる学びは限られてくる。その時にこのような問いが浮かぶのではないか。」

「自分は単位をもらうためにあまり興味のない講義も受けたりしているため、等価交換が成り立っていると思っただが、自分が知りたい学びたい楽しいと思える講義があれば、単位がもらえなくてもその講義は受ける など思っただけで考えれば考えるほど自分のことがわからなくなった。」

ほか多数

過去の投稿から

「自分が理解出来る事だけ学ぶという事にわたしは賛成です。大学というものはその為にあるのかとも思っています。自分で選ぶ学部、学科、確かに必修科目もありますが8割は学科授業です。高校で古典などの授業がありましたが意味があるのかとずっと疑問を持っていました。自ら学びたいと思って勉強した事と強制的に学ばされるでは身につけ方が違うと思います。」

「知らないことは、学ばなくてもいいのか、とありましたが、それではいけないと思いました。しかし、実際、思い返してみると、知らないこと、興味のないこと、よくわからないこと、なぜ学んでるかわからない授業の内容は、残念ながら学んだはずなのに記憶に残っていません。学ばなくてもいいとまでは、言いませんが、興味のないことなどは、記憶に残らず学んでも学ばなくても頭に残らなければ変わらないのでは、と思いました。そのため、自分が知りたい、興味のあることだけを学んだ方が個人の能力が上がるが、一方新たな発見、興味がなかったが学ぶことにより興味が出るといった新たな可能性はなくなってしまうと思いき結局、どちらとも良いとは言えないと思いました。」

「今の生徒は 目先の便利さ とか 自由さ に囚われているのかなと思った。今すぐに役立つことでないと、学んでいる実感がないし学ぶことは楽なことではないから理由をつけて学ぶことから逃げている感じがした。小中高で学んできた科学や数学はすぐには役に立たないが、自分の私生活でその科学や数学が活かしていること、またその考え方を応用するために学んでいたんだとわかることが大切だと思う。」

「自分が理解できることだけを学ぶということについては、反対です。これは逃げだと思えます。確かに何の役に立つの？という授業はありますが、これら全てを含めて教育だと思えます。私は大学に不必要な授業なんてないと思えます。受ける意味が何かしらあると思えます。自分には必要のないと思っている授業も受けることで「学ぶ」という力が備わるのではないのでしょうか。」

「私は、大学というところは自分の可能性を広げ、視野を広くする場所であると思えます。なので、内田さんの「それらそのものが何の役に立つのかをまだ知らず、自分の手持ちの度量衡では、それらがどんな価値を持つのか計量できないという事実こそ、彼らが学ばなければならない当の理由」ということに賛成です。私は自分の物差しをのばしていきたいと考えています。また、授業を行い学ぶ意味は時間が経たないとわからないということを理解したので、「とりあえずやってみる」という精神が大事だと思いました。こうして経験をしていくうちに、自己決定も自分でして後悔しない道に進めるようになるのではないかと考えました。」

「内田の問いは一見極論のように見えますが、実際のところ多くの人の凶星を突いていると感じました。「何の役に立つの？」という点については私自身も例外ではなく、意欲なく取り組んだ学習も多くありました。特に「わからないことがあっても気にならない」という問いは多くの人に当てはまる問題だと感じました。周囲の話を聞いているとこの傾向は非常に多く見受けられます。無知であることはいずれ自分に恥と失敗をもたらす大きな問題ですから、もっと各々が問題意識と危機感を持つべきであると日々考えています。結論として、内田の問いは、自分たちに当てはまるかそうでないかという事実を考えることよりもこの問いに当てはまった自分は一体普段何をどのように思考し、受け止め、行動しているかを客観的に見るための非常に良い材料だと考えました。」

「…今回、学びというより授業(学習)に視点があったと思えます。私個人としては、学びはどこでも発生しているものだと考えています。授業はその入口のひとつに過ぎない。一般に学習から距離が置かれるゲームや漫画、動画にはまることも(限度はあるにせよ)、見て感動して知ろうとする、という点で一種の学びであり、その入口だと思います。世間から、生産性がなく社会に出て役に立たない学び、という判断が下されているだけです。ただ、それが分岐なのだと考えます。分けるから、興味を持たせることができない。問題は、環境の変化ではなく、学習を勧める側にも学習をする側にも存在する『学びとは』という先入観、なのではないのでしょうか。“学び=授業”という話しにいく傾向にあるのも、それが『退屈である』となってしまうのも、「勉強しなさい」が“授業の”だったり、“学力を上げる”にしか向いていないということの表れだと思います。因みに、以前から私は友人や兄弟に勉強の楽しさを伝えようとしてきましたが、彼ら個人が実感するまで、全く理解されませんでした。」

3. 参考：「オレ様化」と「近代社会」（諏訪 2005）

近代社会における個人の学習課題、学校の教育課題

- 日常生活のなかで身につけてきた感覚や知識が相対化されたり、否定されたりする経験
- 自己を超えた客観的な視点に立つこと
- 自分では「真実」を確信することができず、自分自身では確かめられない真実や普遍があることを認知すること
- 自分の目には見えないもの（こと）や、自分にわからないもの（こと）にも価値があることを知ること

[が必要であるにも拘わらず、少ない]

↓

対等意識（教師 - 生徒）のもとでは教育関係は成立しない

まず「共同体的」関係のもとでの学び、その後「市民社会的」関係による学び

4. 改めて授業運営について

読んで精確に理解すること

考えること、考える力

自分の考えを他者に伝えること（公的なコミュニケーションスキル）

5. 確認：議論の方法 ——何を話せばいいのか

筆者の主張（相手の発言内容）に対する

① 質問

- 言葉・用語の意味がわからない
- どういうことを云っているのかがわからない（説明があいまい、具体性に欠ける…）
- こういう理解でよいのか（説明が不十分なので精確に理解できない）

② 共感

- この主張、この指摘、この言葉はそのとおりだと思う。的を射ている。
- これと関連して、このような事例も挙げられる／こういう云い方もできる

③ 疑問・批判

- 根拠は？
- 5W2H
- こういうふうに考えたほうがいいのではないか… etc.

cf. “5W2H” の発想（以下、たとえば）

When

- 昔からそうなのか
- その解釈は今もあてはまるか

Where

- どの社会・地域にもあてはまるか
- 全国一律にそうなのか

Who

- 誰にもあてはまることなのか
- 誰がみても、そういえそうか

What

- 何を云っているのか（正確な理解。著者が主張しているのはどのようなことか）
- 何に対してもあてはまるか

Why

- なぜそういえるのか（根拠）
- なぜその現象が起きるのか（原因）

How

- どんなメカニズムでそうなるのか
- どのように考えるべきか

ホントに？

- ホントにそういえるのか
- 解釈や根拠に誤りはないか

6. 「仲間以外はみな風景」：昨今の論評・指摘

(1) 「コミュニケーション不全症候群」：中島梓

小学校に入学した子どもの送り迎えのために、15年ぶりで混んだ電車やバスに乗る筆者

「こういうことにお心当たりはないだろうか——このごろ、たとえば町とか駅のホームなどを歩いていて、あるいはただ単に電車やバスに乗っていて、むやみと人がつきあってくる。

また、雨の日に道を歩いている。カサを傾けて通してくれる人がいない。みんなむしろカサをタテのようにふりかざして突進してくるような気がする。

あるいは混んだ乗物で降りようとする。するとその前に立っている人間たちが、あたかも『人の壁』であるかのように、まったくびくとも動かない。あなたは必死に、『降ります』『通して下さい』と叫ぶのだが、人々の壁は、あなたが実力行使で突破するまでまるであなたなど存在しないかのように無表情である…」(中島 1995: 13-15 頁)

そういう「人達はみんな他の人間はまったく人間に見えていないのである。(中略)この人々は、まったく自分の回りに人間が、大小さまざまな人間がいるということが、見えていない、意識されていない、まったく問題外なのであった。」(同 16-17 頁)

「(前略) というか、彼女はあいてをよく知っている人だと認識すると、決してその人の足を踏んだり、まるでそこに空気しかないようにふるまったりしなくなったのである。そのかわりに彼女はその相手に話しかけ、挨拶し、にっこりと笑ったのだ。 (中略) つまりそのとき、彼女が相手を認識することによって、相手ははじめて彼女の知覚のなかに存在したのである。それまで石ころかそのへんの空気にすぎなかったものが、はじめて名前があり、家族や本人の意識もある『他の人間』として彼女に認知されたのだ。」(同 19-20 頁)

- ① 他人のことが考えられない、つまり想像力の欠如。
- ② 知合いになるとそれがまったく変わってしまう。つまり自分の視野に入ってくる人間しか「人間」として認められない。(同 38 頁)

(2) 「仲間以外はみな風景」：宮台真司

「(前略) ひるがえってみれば、平気でパンツを売ったり、やすやす売春したり、人前でキスしたり、街路や電車で座り込むといった、人目を気にせぬ傍若無人な若者たちの振る舞いが話題になっているが、そこで問題なのが、『仲間以外はみな風景』とでも言うべき感受性だ。(中略)

かつては『同じ世間』の範囲が広く、街に出かけるぐらいでは『世間のまなざし』から自由にはなれなかった。ところが昨今の若者たちは街で『旅』をしている。そこでは仲間以外の他者はただの風景にすぎない。教室の中も同じこと。幼稚園から高校、大学にいたるまで、教室の中は2~4人の小グループに細分化している。教師が『仲間だから仲良くしよう』と言っても、もはやトートロジーを超えることができない。生徒は『仲間じゃないから仲良くしないよ』と思いながら黙っているだけだ。」(宮台 1997: 130-131)

(3) 「『通じる人』だけ回路オンにする」 →配布資料（『アエラ』2002年4月1日 No.14）

7. 「仲間 - 他人」意識の変容

彼らは「何一つこの社会の共同幻想を理解し、共有しようとしてはいないのだ。彼らは 社会のそれよりも自分自身とその仲間たちの私的な共同幻想に拠って 自己を作り上げる。そのほかの規範に対してはなんら関心をもたない。」（中島 1995: 311 頁、下線榎本）

「（前略）結局、どういう空間を『郷』として認識し、どういう時間を『旅』として認知するがだけが変わったのだ。変わったのは、仲間意識の及ぶ範囲がとても小さくなったということである。」（宮台 1997: 132 頁）

- 空間の共有と時間の共有 ← 分離・不連続化
- 「共有」感覚を成立させる空間・時間意識の改編
- 共同性そのものは不変

原理的には…

特定の空間に居合わせる人びとの間には、社会的・客観的「関係性」（≡共同性）がある
（これらの関係性自体は、個人によって無視・操作できない）

↓

個人間の関係性そのものが、私的かつ恣意的判断による選択的認知の対象に

- e.g. 「あなたには関係ない」「私は関係ない」
「知らない人との間に関係（性）はない」
相手が「知っている人」or not、「自分と関係がある人」or not を自分が決める？

「認知」→ “他人の存在がそういうふうにはしか見えてこない”

× 「事後の正当化、こじつけ」のみの問題

○ 認識枠組みがそのように形成されている

e.g. わざと相手は無視する ⇔ 他人を「無視している」状態にあることに自分で気付かない

空間と時間の共有 ≡ (集団・「仲間」への) 帰属感・所属感 ≡ (主観的な) 「共同性」感覚

↓

空間の共有 ≠ 時間の共有 ≠ 帰属感・所属感 ≠ 「共同性」感覚

一緒にいる機会が多いからといって、その人が自分の「仲間」「自分と関係ある人」とは限らない…

- * 過去の日本にはみられなかった新たな社会・人間関係
- * 過去の知恵が通用しないコミュニケーションのスタイル

8. 他者の観念的消失：中西

「他者の観念的消失」

＝意図的であるかどうかを問わず、社会生活のなかで否応なく触れ合う他者の実質を感じとれず受け止められない（経験として内化できない）意識や態度のあり方
他者の介入的態度の具体性を意識のうえで消してゆくこと

他者の「実質」

ex.

- 自分を押しつけて通る肉体そのもの
- 自分の内的世界をむき出しにしてしまうように感じられる相手の言葉
- 具体的な親切

狂信にとって具体的な他者の存在は一つのつまずきの石である。思い通りにゆかぬ他者の存在やこれにたいする顧慮は自らの信念を揺るがす大きな要因だからだ。信念をつらぬくことは他者の介入的行為や態度との曲折に満ちた現実的なやりとりの軌跡にほかならないが、狂信はそうしたやりとりを省略して他者の介入をあらかじめ排除しようとする。すなわち、他者の具体的な存在を観念的に消失させてしまえるような内面機制を追求する。（中西 2004: 314）

- 同じ「境遇」や社会的状況にある者（水平的な他者）を発見しにくく、まして共同などもっとむずかしいという事態
- 日常生活の次元での文字どおりの孤立がまさに大衆的な規模で出現してしまい、「わかりあう」関係の困難が親密圏の内部にまで及ぶ、という社会的現実

9. ディスカッション

ディスカッションについての確認：

- 一定の見解へと誘導しているわけではない
- 「正解」というものはない
- 議論の「正しい方向性」というものはない

10. 引用・参考文献

- 中島梓、1995、『コミュニケーション不全症候群』ちくま文庫
宮台真司、1997、『まぼろしの郊外——成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞社
「20代「わかりません」族」『アエラ』朝日新聞社、2002年4月1日 No.14
正高信男、2003、『ケータイを持ったサル——「人間らしさ」の崩壊』中公新書
中西新太郎、2004、『若者たちに何が起きているのか』花伝社、第19話
奥村隆、1998、『他者という技法——コミュニケーションの社会学』日本評論社

11. 次回までの課題

授業 HP の掲示板 (BBS) への書き込み

- 初回～今回までの授業運営に関するクレーム・リクエスト・感想
- 期限：1 週間 (11/18 23:59 まで)

12. 次回の予告

11 月 19 日 窒息する友人関係

以上

【授業 HP】 <http://t-enomoto.la.cocacn.jp/komajo/>

【BBS】 <http://9021.teacup.com/tenomoto4/bbs>